

キャラクター名  プレイヤー名

メインクラス	アコライト	Lv.1:		レベル	5
サポートクラス	モンク	Lv.1:	モンク	性別	女
称号クラス				年齢	12歳
種族	妖魔 (ジェルボア)			境遇	天涯孤独
出自 (効果)	市場の華			目標	強制

	筋力	器用	敏捷	知力	感知	精神	幸運
基本値	9	15	12	9	16	19	6
ボーナス	3	5	4	3	5	6	2
クラス修正	1	1	1	1	0	2	0
他修正		1			1	3	
能力値	4	7	5	4	6	11	2

HP	52
MP	66
フェイト	5

装備品		射程	命中	攻撃	回避	物防	魔防	行動	移動
右手	S1ミスリルナックル	至近	1	8					
左手									
頭部	S3ハット					1			
胸部	S3クロスアーマー					3			
補助	ポイントアーマー					-1	3		
装身具	秘伝書								
能力値			7	0	5	0	11	11	9
スキル	アイソフィスト			11					
その他	秘伝書			2					
総計(右)			8	21					
総計(左)			7	13	4	7	11	11	9
総計(両)									m
ダイス数			3 d	2 d	2 d				

	能力値	スキル	その他	合計	ダイス数
トラップ探知	6			6	+ 2 d
トラップ解除	7			7	+ 2 d
危険感知	6			6	+ 2 d
エネミー識別	4			4	+ 2 d
アイテム鑑定	4			4	+ 2 d
魔術判定	4			4	+ d
呪歌判定					+ d
錬金術判定					+ d

所持品	
ベルトポーチ	
バックパック	ポーションホルダー
	▼MPポーション × 5
小道具入れ	MPポーション × 5
▼ランタン	HPポーション × 2
▼チョーク/筆記用具/火打ち石・火打ち金	
▼ロープ	聖印
ランチボックス	野営道具
▼野菜 × 5	

現在重量: 10  
 最大重量: 16  
 所持金: 11  
 預金・借金:

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
クラフトハンド	★		パ°ッパ°					
効果:	【器用基本値】+2 【精神基本値】+1							
プロテクション	5	3-1	DR直後	20m	単体	自動成功	1/防御	
効果:	対象が受ける予定のダメージに-5D							
ヒール	1	4-1	Xジャー	20m	単体	魔術		
効果:	HP回復。[3D (聖印4D) +CL×3] 点回復							
アームズマスタリー: 格闘	1		パ°ッパ°					
効果:	格闘の命中判定+1D							
アイアンフィスト	1		パ°ッパ°					
効果:	格闘のダメージに+【精神】							
マーチャントセンス	1		パ°ッパ°					
効果:	プリプレイに【器用】×100G							
クイックヒール	1	5-1	インシパ°				1/シーン	
効果:	《ヒール》使用可能							
ラッシュナックル	1	3-1	ムーブ					
効果:	戦闘移動が全力移動。命中判定+1D							
ペネトレイトブロー	1	6-1	Xジャー	武器	単体	命中		
効果:	【物理】【魔法】防御0扱い							
テレポート	2	10-1	Xジャー	至近	範囲(選択)	魔術	1/シーン	
効果:	記憶場所に転送。拒否化。記憶はXジャー、数はSL個まで。							
インデュア	1	5-1	効果参照		自身		1/防御	
効果:	BS受けた直後。回復する。							
マインドアダプト	1		パ°ッパ°					
効果:	【精神】+2							
アフェクション	1		DR直後	20m	単体		1/シ	
効果:	ダメージを0に変更							
インサイト	1		パ°ッパ°					
効果:	嘘・はったりを見抜く【精神】判定+1D							
ブラフ	1		パ°ッパ°					
効果:	嘘・はったりをする【精神】判定+1D							

オルクス (ラン科/チドリソウ亜科/オルクス連/オルクス属)/クニークルス (兎。ラテン語)  
 初期スキル アコ/プロテクション1 プロテクション2 ヒール  
 モンク/アームズマスタリー: 格闘 アイアンナックル

幼少の頃、商売が盛んなった街で生まれそこで基礎を学ぶ。  
 まだこの頃は自分のことをヴァーナの亜種のようなものだと思っていた。  
 4歳のころ、その街が「墮ちた英雄ガイア」による戦乱の火に巻き込まれた。  
 両親もその戦火にのまれ、オルクスを守って大怪我を負った。だが、そのままでは結局家族全員この戦火で死亡する。  
 ならせめて両親だけでも。そう願った私に奇跡は起きた。  
 “魔法に目覚めた”のだ。  
 侍祭の魔法。《ヒール》の力は……それでも両親を助けることはできなかった。  
 だが、両親はほんの少し、力を取り戻し、私を送り出した。

それから私は放浪した。  
 妖魔の血の入った私がまだ受け入れられていたのは大人が居たからだと知ったのはこの時だ。  
 だから私は手練手管を磨いた。  
 相手の嘘を見抜き、相手の望む答えを探り当て、気分良く望む居場所を一時的に得る術を。  
 そうして、生活の糧を得た。幸いにして身体を売るようなことがなかったのは良かったことか。

基本は放浪を続け、糧を得る時だけ街に忍び込む。  
 そんな生活を続けていた私に、接触してきたのがグライア谷の者だった。  
 そこで、弟と出会い、無理矢理世話係とされた。面倒だった。だが衣食住の確保は魅力的だった。

